

高等学校国語科における『こころ』指導の再検討

—「語り手」の分析と授業提案—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 言語・社会科学系（国語）

山本 真梨奈

本研究では、高等学校国語科の定番教材である夏目漱石『こころ』を題材に、読解において一つの「正解」を求めようとする生徒の受動的な姿勢からの脱却を目指し、教材分析及び授業実践を行った。

まず、教材分析として草稿と定稿の対照分析を行い、語り手が抱える矛盾や作為を明らかにした。その知見を基に、二段階の実践を展開した。一次実践では、「夢十夜 第六夜」を扱い、語り手の視点を意識させる基礎的な読解指導を行った。続く二次実践では、『こころ』を扱い、「構造図」を活用して作中の「事実」と語り手の「心情」「言動」を可視化し、生徒が語り手の信頼性を批判的に検討できる授業を行った。

実践の結果、当初は語り手の言葉が無批判に受容していた生徒たちが、テキストの細部を根拠として論理的な解釈を構築する主体的な読み手へと変容していた。本研究を通し、文学作品を単なる物語として受容するのではなく、構造を持ったテキストとして捉え直す指導法が、生徒の読解力を育成する上で有効であることが明らかになった。